

パーキンソン病の早期診断と disease modifying therapyの 可能性を探る研究の現在

近年、パーキンソン病（PD）の運動症状の発症前にすでにドパミン神経細胞の脱落が始まっているという知見が報告されている。これを受けて、運動症状発症前の治療を実現するため、さまざまな研究が行われている。しかしながら、現状、PDの診断は運動症状の発現が基準となっており、早期の診断・治療には大きな困難があるのも事実である。

今回は、早期診断や疾患修飾治療（disease modifying therapy）の研究が現在どこまで進んでいるのか、そして、早期診断・治療の導入がなぜ困難なのか、その問題点についてご討議いただいた。



●ご司会

武田 篤 先生

Atsushi Takeda

国立病院機構仙台西多賀病院
院長

村田 美穂 先生

Miho Murata

国立精神・神経医療研究
センター病院 病院長

宇川 義一 先生

Yoshikazu Ugawa

福島県立医科大学
医学部神経内科学講座 教授

望月 秀樹 先生

Hideki Mochizuki

大阪大学大学院
医学系研究科神経内科学 教授